

## 学校教育目標

### まるとの「自分」を好きになれる子どもの育成

#### 「自分」を大切に＝自己理解⇒（信頼される教職員集団になる）

自分を大切にするためには、自己を理解することから始まる

#### 「自分」の周囲の人たちを大切に＝自他の尊重・自己有用感⇒（多様性を認める教職員集団になる）

自分にも周囲の人たちも各々の良さがあることを認め合い、自分ならではの経験をもって、よりよく生きようとする思いを大切にする

#### 「自分」の願いを大切に＝キャリア開発⇒（主体性を育む教職員集団になる）

自己を理解し、周囲の人たちと共に願いを持ち、将来の夢に向けて挑戦し、自己実現を図る

#### 児童生徒の目指す姿 「自分を 今より好きなる」

- 自分 :「自分」の体と心を大切にしよう（自己理解）
- 自分と人 :「ありがとう」と言える人・言われる人になろう（自他の尊重／自己有用感）
- 自分の思い :「願い」を持ち、チャレンジできる人になろう（キャリア開発）

## 学校経営方針

### 病気のときだからこそ行すべき教育の推進と継承

～ 病院等関係機関とのつながりを生かし、入院児童生徒を適切に教育・支援し、次のステージへとつなげる ～

#### 病院等関係機関との関係性を生かし

医療や福祉とのつながり、学校間のやりとりによって得られた専門性やネットワークを生かし社会に還元していく

#### 入院児童生徒を適切に教育・支援し

様々な病気や背景をもって入院してくる児童生徒のそれぞれの状況や特性に対応した教育・支援を行う

#### 次のステージへとつなげる

復学に向けた学習や支援（在籍校・前籍校と医療・福祉をつなぐコーディネートを含む）、復学後の支援、病弱教育に関する啓発等、病弱教育における支援・センター的機能を果たす

## 育成を目指す資質と教育方針

医療と連携した教育を推進する。

指導・支援にあたっては、肯定的な態度で接し児童生徒の「心理的な安定」と「前向きな気持ち」を育むとともに、学ぶ意味や楽しさがわかる授業を通して、主体的・対話的に学ぶ力を高める。

小集団指導の特性を生かして知識及び技能を習得するとともに、プレゼンテーションや議論を含む探究活動等を工夫して、習得した知識及び技能を生かす思考・判断・表現(コミュニケーション)の力を高める。

ICT機器等を活用し、全ての学習活動において主体的・対話的で深い学びを推進する。指導・支援を行うにあたっては、定期的にケース会議を持ち、入院してくる児童生徒のそれぞれの状況や特性に対応した教育・支援を行う。

## 自ら学ぶ力を高めるために

- 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実
- 一人一人の学習状況とその背景・特性を踏まえた学習の定着
- 「集団で学ぶ楽しさ」と「わかる喜び」「考える大切さ」が実感できる授業の展開

## 自ら律する力を高めるために

- 自己有用感や自己肯定感などの高揚を図る取組
- 目的意識を共有し、互いに認め励まし合う共感的な人間関係に基づく集団づくりの実践
- いじめをはじめあらゆる人権侵害を許さず、人間の尊厳の大切さを実感できる指導の徹底

## 桃陽総合支援学校の重点

### まるごとの「自分」を好きなる子どもの姿を実現するために(復学に向けたステップ)

- ① どうありたいのかという思いを持てる 見通しの確保、学びの再構築
- ② どうありたいのかという思いが行動に反映される 積極性と自律、学ぶ意欲の向上
- ③ どうありたいのかという思いが結果に反映される よりよい生活・学びスタイルの確立

### まるごとの「自分」を好きなる子どもの姿を実現するために何をどのようにするのか

#### <カリキュラムマネジメントの視点から>

- 個別の包括支援プランをより一層充実させる(教育・医療・福祉・家庭の連携、ケース会議の充実)
- 児童生徒自身によるキャリアプランの構築(桃陽版キャリアパスポートの活用)
- 思考力・判断力・表現力を豊かにする言語活動の実施(作文やスピーチ、議論、プレゼン等)
- 前籍校との交流学习の推進(行事参加型、ネット通信交流型、移行型)
- 学びに向かう気持ちを高める行事や発表のあり方を工夫するとともに、各教科と関連付ける

## 令和6年度の重点的な取組

- (1) 児童生徒が安心して学校生活を送ることができる環境作りを全教職員で行う
- (2) 「個別の包括支援プラン」に基づき、自立活動の目標を取り入れた教科学習の実践
- (3) 前籍校への復学を前提とする個別的教育支援計画を重視した「個別の包括支援プラン」を作成
- (4) 定期テスト等に偏ることなく、教育活動全体を通し、各教科の特性を生かした新しい学力観に沿った評価  
(3 観点「知識・理解」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」)
- (5) 児童生徒の興味・関心を生かした主体的・対話的で深い学びを実現した授業の推進
- (6) 医療機関や前籍校と連携した児童生徒の指導・支援を充実
- (7) センター的機能の充実を目指し、全市の病弱支援学級への支援、小中高の校内研修での病弱教育の理解を進める研修等の積極的な実践
- (8) 退学時の合理的配慮等の丁寧な引継(必要に応じた復学先への支援を含む)
- (9) キャリア教育の視点に基づく教育活動の指導・支援の推進
- (10) ICTを活用した合理的配慮のより一層の充実
- (11) 文部科学省「ICT を活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実事業」の受託と継続性を考慮した高校生支援の継続

## 令和6年度学校運営の重点

### (1) 相手の立場に立つ

- ・ 対保護者、対前籍校等においては、相手に寄り添いながら、誠意をもって対応する
- ・ 医師及び病棟看護師はじめ、関係者の視線や考え方を常に意識し、よりよい協力関係を築けるように、言動や行動に注意し信頼関係を築く

### (2) 小学部・中学部、本校・分教室の枠組みを超えた連携・協力体制

- ・ 必要に応じて、小学部・中学部、本校・分教室の枠組みを超えた全校指導支援体制で臨む
- ・ 児童生徒数の変動等に応じて、分教室間、本校⇄分教室⇄支援部間の体制を柔軟に調整する
- ・ 訪問教育・教育相談については、窓口担当は支援部に置くが、指導支援については指導部全体で行う

### (3) 医療や前籍校との連携をより確かにするために医教連携コーディネータを位置づける

- ・ 各医療機関や前籍校(高校生支援の場合は在籍高校)との教育の窓口となるとともに、ケース会議等の様々な調整を行う。(本校、京大・府立分教室に配置)

### (4) 児童生徒指導に関する教員間の共通理解を図る

- ・ 児童生徒にとってよりよい指導支援を行うために、軸となる指導の一貫性と児童生徒個々の違いに基づく指導の多様性の両面について機能するようにする

### (5) 学外教育活動支援は部の枠を超えて行う

- ・ 小中学校に対するICT接続支援、その他、研修の講師依頼等については、支援部が窓口となり調整するが、実際の動きについては部の枠を超えて取り組む場合がある
- ・ 高校生支援では、医教連携コーディネータによる病院と高校のコーディネートを行う。なお、高校の遠隔教育に協力し、T2として教育に携わる場合がある

### (6) 働き方改革にともなう勤務時間のさらなる縮減

- ・ 8:00 留守電解除、18:00 電話対応終了、原則 18:30 閉門
- ・ 行事を精選・再構築する。教材等についてはこれまでの蓄積を有効利用すること
- ・ 企画・立案することと、それに基づいて資料等を作成することを可能な限り分離し、校務支援員の業務として依頼する等工夫する

### (7) 病院と学校の関係

- ・ 従前どおり、入院＝入学、退院＝退学 であり、結果的に入退学は病院(主治医)の入退院の判断をもって決まる。学校は求められれば入退院の決定に資する情報提供は行うが、あくまでも決定は医療がすべきことを確認する
- ・ 学籍の異動日については、入退院の状況を踏まえて、桃陽と当該校の校長間で決定し、両校の担当者間で手続きを行う
- ・ 病院とは常時連携し、信頼関係の構築に努める

## **\*分教室での指導の基本的な考え方**

- ・ 治療の状況から通常と同様の履修を求めていくことは身体的・心理的負担となることを踏まえる
- ・ 心理的適応をはじめ自立活動の内容をふまえた指導・支援を行う。また「入院している時だからこそ」経験できること、人との関係性を大事にし、「学びに向かう力」を育むことに重点を置く
- ・ 分教室の実態に応じた、適切な「個別の包括支援プラン」のさらなる改訂をしていく
- ・ 特に分教室においては在籍状況が頻繁に変わるため、小学部教員と中学部教員は相互に連携し、必要に応じて他学部の支援を行う
- ・ 分教室での指導は籍の異動を基本とする。ただし、高校等受験の場合、依頼があれば出願時をもって前籍校に戻る
- ・ 分教室において教科の指導は京都市スタンダードを参考に基本的には集団(単式・複式)で行う
- ・ 分教室中学部においては当該学年集団を本校や他の分教室とつないで作り、学習集団とする。配信する全体指導者の他に、必要に応じて受信側にT2が入るようにする
- ・ BS(ベッドサイド)においてはタブレット端末で常時通信接続が可能な状態にして、分教室や本校からの授業配信を受けられるようにする
- ・ ICT活用を通じた学習やオンデマンドの教材開発・活用の仕方など、今後も研究を進めていく

## 学校教育目標

### まるごとの「自分」を好きになれる子どもの育成

#### 児童生徒の目指す姿「自分を 今より好きになる」

##### 自分と社会

「願い」を持ち、チャレンジできる人になろう  
(キャリア開発)

##### 自分と他者

「ありがとう」と言える人・言われる人になろう  
(自他の尊重/自己有用感)

##### 自分

「自分」の体と心を大切にしよう  
(自己理解)

信頼される教職員集団（一番の環境は教職員である）

##### \*自ら律する力

☆自己有用感や自己肯定感などの  
高揚を図る

##### \*自ら学ぶ力

☆「個別最適な学び」と「協働的な学び」の  
一体的な充実

##### 子どもが目指す姿を 実現していくステップ

##### ★どうありたいのか★

- ① 思いを持つ
- ② 行動に移す
- ③ 振り返る

##### カリキュラムマネジメントの視点から

##### ○「個別の包括支援プラン」の確実な立案・改訂

- 言語活動の充実
- 教科等におけるICT機器等活用の推進
- 前籍校との交流学习の推進
- 個別や少人数での学びの利点を生かした教育・支援の推進
- 各教科との関連付けを図る

##### 育成を目指す資質と教育方針

- 1 学びへの力を高める:前向きな気持ち、学ぶ意味や楽しさ、集団の良さ
- 2 知識・理解・技能の習得:少人数学習、ICT活用、合理的配慮
- 3 思考・判断・表現の力の育成:課題設定の工夫、探求活動の工夫、多様な表現活動の保障

##### 学校経営方針

##### 病気のときだからこそ行おうべき教育の推進と継承

～ 病院等関係機関とのつながりを生かし、入院児童生徒を適切に教育・支援し、  
次のステージへとつなげる ～